

ソ同盟における富農対策

一、階級社会における弁証法

二、ソ同盟における富農対策

——その合法則性——

阿 部 矢 二

一、階級社会における弁証法

いずれの社会においても他の階級を政治的に抑圧し、経済的に搾取することをもって自己の階級的存続の基礎としているところの一階級は、この基礎につながる利害関係から決して自由になることはできない。搾取階級の最大の関心は、勤労者の剰余労働の果実を無償で取りあげることの一点に集注される。そして、この種の経済的利益は多ければ多いほどいいという限りのない慾心の対象となるだけのもので、搾取すること自体についてはそれが客観的に肯定されうるどんな理由も見出すことはできない。ただ、事実として他人の労働の搾取は力づくによるほかない、これは説得の方法で、被搾取者を納得させたりえて、やることはできない、ということとは明らかである。剰余労働の搾取は力に対する勤労者階級の隷従を条件としておこなうだけである。

力は本来無理論的なものであり、結局は物理力として発動するものであるが、力を掌握して支配し搾取する階級は、できることなら理由なしの力による支配と搾取とになんとかの理由をつけ、あからさまな暴力による抑圧

と搾取に対する勤労人民の忿懣と反抗をごまかしそらせたのである。それで階級社会における支配的イデオロギーは、種々雑多な形態と内容をもつとはいえ、帰するところ支配階級のためにその支配と搾取の合理性をでっちあげ、その体制の永遠化をはかる種のものであるか、あるいは、搾取のからくりと人民の窮乏・不幸の原因についての真実をおおいかくし、人民を欺瞞し愚昧化することによって人民の反抗を眠りこませ、解放闘争の目標を失わせ、その方向を誤らせようとするような意図を含むものかである。

階級社会の基礎に根を張っている不合理性は、それゆえにこの社会の支配階級をして真実の前に怯懦ならしめる。彼らは人民の前に真実が暴露され、そのため彼らの支配の土台が崩れ去りはしないかについて常時おびえている。それだから、例えば資本の蓄積に照応する貧困の蓄積を不可避的に伴う資本制的生産様式の矛盾が激化し、プロレタリアートが公然と階級闘争に立ちあがるや否や、ブルジョア経済学は真理を探究する科学から真理を歪曲しおおいかくすための、結局ブルジョアジーに経済的実利をもたらすための思想的道具に転落してしまったのである。マルクスは「資本論」でそれを指摘していつている。

「ブルジョアジーは、イギリスおよびフランスではすでに政治的権力を奪取した。そのとき以来、階級闘争が、実践的および理論的に、ますます公然かつ威嚇的な諸形態をとった。それは科学的ブルジョア経済学の葬鐘を鳴らした。いまや問題なのは、もはや、この定理が正しいかあの定理が正しいかということではなくて、それが資本にとって有益か有害か、好都合か不都合かということ、警察の忌諱にふれるか否かということであった。私心のない研究の代りに慾得づくの論難攻撃が現われ、とらわれない科学的研究の代りに心やましく意図あしき論弁が現われた。」

十九世紀半頃、資本主義がまだ上向線をたどりつつあった自由主義の段階におけるイギリスにおいてさえ、右のようにブルジョアは本質的には搾取階級としての反動性をあらわしたのである。その時代のイギリスは、それでもなお典型的な自由の国として政治的亡命者のため逃避場所を与え、例えばマルクスをして資本主義社会の解剖の仕事させざるほどの、消極的ではあるが或る種の余裕を示し得た。ところが、その後約百年を経た現在「自由な諸国」は進歩のために、人民の啓蒙のために、真実をおし抜け人民の福祉を加えるために、何かの寄与をするだけの寛濶さを示すことができたであろうか。この世界の事實はこれにたいして全く否定的に答える。

原子力を自由にするまでの高度に発達した科学と生産力を人民の福祉のためではなく、逆に人間の大量殺戮のために用いるほか手がないまでに帝国主義的諸国における生産関係は活力を失って化石化し、自らを危機・瀕死の段階に追いつめてしまった。戦争の冒険だけが、生産力の破壊だけが、自壊||恐慌からの唯一の逃れ道であり、独占資本に最大限の利潤をもたらす可能性を与えるものであるかの如き錯乱が、自由な諸国の支配者をとらえている、事實を事實と見て正当に推理する知能を失った精神錯乱者にとっては、事實の有無真偽ははじめから問題ではない、ただ彼らは貪慾と好戦的野望だけを押し通そうとするのである。そして、そのためには人民大衆を同様の錯乱状態に陥れなければならない。反共を一枚看板にして侵略の脅威にたいする防衛、西欧文明の擁護が、戦争屋のスローガンとなり、平和のための戦争が侵略戦争を煽り立てている。支配階級の文化政策は、最高文化の産物を動員して文化を破壊し、人民を迷わし、ごまかすことを目的とした人民愚昧化政策に逆転してしまつた。これに反して、自由な諸国から仲間はずれにされた、したがってその精神錯乱からは自由な中国の郭沫若氏は、おのずから自由な諸国の支配者とはちがったロジクでものをいっている。

「朝鮮の人民は朝鮮を解放したいと思つています。トルーマンは、これを朝鮮人が朝鮮を『侵略』するとほざいて、アメリカ海空軍に『保護』するよう命令しました。マッカーサーも公然とアメリカの海空軍を出動させました。台湾は中国の台湾であるのに、アメリカのいわゆる第七艦隊はついに『同地区において合法的に必要なる職務を実施し』トルーマンはついに公然と『第七艦隊に台湾に対するいかなる攻撃も阻止するよう命令した』ファシスト以外に、天地のあいだにこういうロジックがあるでしようか？」

解放と侵略、保護と圧殺、合法法と非合法法、というような相反する事実と概念が正常的にはなく、逆転して用いられる。そうして、この逆転されたロジックは結局戦争を平和に、平和を戦争に、いいまぎらすことに集中される。平和と戦争の双方からの脅威で煽りたてられた自由な世界はまったく混乱させられてしまふのである。力で事実がでっちあげられ、力で事実が抹殺される。

「今日世界が混乱しているのは、ごく少数の利己主義者たちが超過利潤をえようとして、理智を完全になくしてしまつているためです。少数の人たちの理智がくらんだということは、小さなことですが、大量の宣伝機関が彼らの手ににぎられ、また、大量の殺人武器が彼らの手ににぎられて、世界の人民がかつてない脅威と災害をうけざるをえないということは、はるかに不幸なことです。

真昼間でも平気で黒を白といい、欺まんによって人びとの感覚をおさえつけ、欺まんによって大気をおおうというような、今日おこなわれているこうした大規模な欺まんは、人間の歴史はじまつていらひ、かつてみなかつたものなのです。」

このような、人間の歴史はじまつていらひの大規模な欺まん政策を採らざる得ないという事実は何を物語るで

あろうか。それは独占資本がその本来の役割をおえずに腐朽化したために、新らしく生れ出た予定の後継者に絶えずこの世界から退場するよう迫られていることにたいする彼らの恐怖を現わしているのであり、必滅の運命にたいする理性を失ったものの最期のがきを示しているのである。眞実を恐れて欺まんにかじりつく点に独占資本の弱味が集中的に暴露されている。彼らは眞実を、必ず貫徹せずにはおかない歴史法則の合法則性を、認め理解する能力を喪失してしまつたのである。

新たに生れいで伸びつつあるものの力に抗しうる如何なる力も存在しない。世界では常に何ものかが生れつつあり、何ものかが死につつある、新らしいものが古いものにとつてかわりつつある。これが世界の・物質の・弁証法的ありかたであつてみれば、独占資本の支配者が弁証法にたいして、それが現存するものをその「無常的な側面」から理解するのゆえをもつて、どんなに痛憤したからといって理法は寸毫も曲げられないのである。うそが敗れ眞実が勝ち、歴史は前進する。

戦争で勝つための根本的条件は、自己と敵との力関係について、戦争の全過程において起りうべき力関係の變化について、客観的に正しい認識と予測とをもつことである。近代戦は科学兵器の質量が戦闘の技術的条件を決定するほどの重要性をもつとはいへ、国の総力戦といわれるこの戦争の勝敗を終局的に決するものは、相戦う国々のそれぞれの社会組織乃至社会体制の健全性、強靱性の程度である。したがつて、おのれを知り敵を知り、戦争に勝つためには、自他の社会体制を知る事が第一である。そのために準拠しうるただ一つの科学的方法と理論は、唯物弁証法とそれの社会現象への適用である史的唯物論である。

ところが、ブルジョアジーはその階級的立場に制約されて「資本主義的秩序を社会的生産の歴史的・一時的な

發展階級とは解しないで、逆にその絶対的で窮極的な姿態」としてよりほか解することができない、それゆえ「現存するものの肯定的理解のうちに、同時にまた、その否定の・その必然的な崩壊の・理解」をも含むところの合理的な姿態における弁証法を、受け入れることは、彼らにとっては死の宣告を認めるのと同様不可能である。その階級的利害に阻まれて真実を恐れ、欺まんによって真実がおおいかくせるものと思ひ、僅かにその日の延命を希うところに独占資本の支配者の致命的弱点がある。

事物の弁証法的存在にたいして眼をおおい、真実の前におそれおのくものは、おのれを知り敵を知ることによって確かに勝ちうる戦争を闘うことができない。真理に背をむけ反動化したブルジョアジーの哲学は観念論以外にはない、観念論的認識によるかぎり事物の真相に徹することは不可能である。「彼らは、資本主義体制は一箇の搾取者体制であるという純粹の真理を承認しようなどとは毛頭かんがえていない。彼らの多くは、彼らの見ている樹木はそれを誰も知覚し得なくとも存在し得るといふ、どう見ても『純粹に科学的な』真理をさえ承認しようとしな^いい。」

こうしたブルジョアジーの哲学と認識の非科学性は、それを社会主義体制に適用する場合に最もいちじるしくさらけ出される。例えばヒットラーはソ同盟に侵略戦をしかけたとき、彼はその電撃作戦によって、数週間のうちソ同盟を征服できるという予想を世界に誇示した。ところが戦争の結果は、周知の通り、ヒットラーの予想を痴人のたわごととして実証した。彼の予想をたわごと化したのは、とりもなおさず、彼のソ同盟の社会体制とそれを支えている原理についての全くの無知であった。スターリンはソヴェト体制にたいするドイツ人の笑うべき理解の低さを次のように述べている。

「ドイツ人はソヴェト体制の脆弱さ、ソヴェト統後の脆弱さをあてにし、最初に真剣な一撃を加え、赤軍が最初に失敗した後、労働者と農民の間の紛争が明るみにで、ソヴェト社会主義共和国同盟の諸民族の間に喧嘩が始まり、反乱が勃発し、国が構成部分に分解し、このことによってドイツ侵略者どもはウラルに到るまで容易に進ずるはずだと予想していた。」

ドイツ人はソヴェト体制のもとでの独裁と階級社会における独裁との質の相違について全然知るところがなかった。だから、いわゆるスターリン独裁は赤軍の失敗と同時に独裁の基礎たる暴力を失う、暴力が弱まれそれで抑圧奴隷化されていた労働者、農民、ソ同盟内の諸民族の不満と忿懣が一時に爆発してソヴェト体制は四分五裂、自己崩壊するだろうと考えたのである。はじめから誤った認識の上になたてられた予想と希望が、その通り実現されないのは当然である。ドイツの最大の敗因は、ファシスト・独裁者の偏狭で、非科学的な世界観であったといえるのである。権力にたいする一切の批判を許すことが出来ないで、力をもってこれを弾圧し去った独裁者は結局自己の姿をありのまま見るための手段をもたなかった。彼は主観的に自己の力を過大評価し、ドイツ民族の優秀とその世界制覇を夢見たにすぎなかった。

終戦後中国の国内戦において、蒋介石を援助したアメリカ独占資本の支配層も、解放をもとめる中国人民の革命的エネルギーとそれによって推進される歴史の不退転のコースについて、また、一方では封建的地主・官僚・買弁的ブルジョアの利益を代表し、その地盤の上になたつ国民党の支配体制が、その内部矛盾の激化によって既に崩壊に瀕する状態にあったことについて、科学的に正確な認識をもっていたとはいわれないであらう、実際、当時アメリカは中国人民の革命的エネルギーでなく、蒋介石の勝利を信じたからこそ約六〇億ドルと評価される援

助を彼に与えたのである。勿論この援助には後日回収されるべき最大限利潤が約束されていた。すなわち米華友好通商航海条約（一九四六年）をはじめ一九四八年に至るまでに多くの条約と協定とが締結され、その結果「中国の領土、領空、領海の權利、軍權、財政權、警察權、司法權、國家機密、農業權、工鉞權、商業權、文化教育權、内政の最終決定權、外交指揮權等は、すべてアメリカの手に掌握されてしまった」^⑤のである。

アメリカ・蔣政權の希望と投資は歴史の必然の前に悉く失われ、アメリカが予定した中国の植民地化による最大限利潤の獲取は水泡と消え去った。この失敗の原因は、アメリカが自己の力を過大評価し、敵の・中国人民の力を過小評価した点にあるが、ことに、社会发展法則についての無理解が致命的である。しかもこの理解力の欠如は、進歩をやめたブルジョアジーにとっては克服し難い階級的・宿命的な弱味である。というのは、歴史によって与えられる新しい役割は、新たに生れいでて伸びてゆく階級だけがそれを理解し担当することのできる種のものだからである。

「社会が今日のように発展した時代には、世界をただしく認識し、世界を改造する責任は、すでに、歴史的にプロレタリアートとその政党の肩にかかっている。科学的認識にもとづいてさだめられた世界の改造という実践過程は、全世界においても、中国においても、すでに一つの歴史的な時期——歴史あってこのかた世界がまだかつて見なかったほど重大な時期——に到達している。それは、つまり、世界と中国の暗黒面を全面的にくつがえし、世界と中国を未曾有の光明にみちた世界にかえる時期である。」^⑥

世界を正しく認識する哲学と方法をもっていればこそ、中国の人民とその党は、世界を改造する責任を確信をもって自負し、その責任を果したのである。はえがいなくなった、泥棒が少なくなった、等新中国の話聞くが、

そのような事実からしても中国が暗黒面を全面的にくつがえし「未曾有の光明にみちた」世界に変わりつつあることの一端が察しられる。

人民の覚は人民の意欲と志向をよく知っていて、それを歴史法則の示す方法と方向にそって指導し実現することができるから「不敗」なのである。一九三七年七月いわゆる蘆溝橋事件をきっかけに開始された日本帝国主義の中国侵略にたいして毛沢東は、どんな抗戦準備をしたか。ソ同盟から武器援助をえようとして利権取引をしたか。否である。彼は同年七月「実践論」八月「矛盾論」を書き、延安の抗日大学で第一線で働く共産党員のために講演したのである。

毛沢東の「実践論・矛盾論」は抗日の実践によって發展させられたマルクス・レーニン主義の哲学だといわれる。抗日戦を勝ち抜くために、彼は何よりも先ず覚を思想的、政治的に統一するためマルクス・レーニン主義によって不敗の思想的裝備をととのえたのである。飛行機、爆弾ではなくて、唯物弁証法の哲学が、抗日戦を勝利に導き、さらにアメリカ独占資本に援助された蔣介石軍を追払ったのである。

人間の社会的実践だけが、人間の外界にたいする認識の真实性の規準である。人間がその仕事に成功しようとするには、つまり予想した結果を得ようとするには、どうしても、自分の思想を客観的な外界の法則性に合致させなければならない。この外界の法則性をつかむには、どうしても弁証法の哲学によらねばならないが、弁証法の合理性の前に畏怖し恐怖する支配階級は、客観的な法則をつかむことが出来ない。したがって、彼らの行動は、外界の客観的法則とは無関係な、彼らの主観的希望や欲望を起動力として、いわばめくら減法に促進されることになる。当るも八卦当らぬも八卦が独占資本の政策・実践である。これにたいして、人民の認識は実践によ

ってテストされたものであり、かくして客観性を与えられた認識のみが行動の指針となる。だから実践においては、あらかじめ予想された結果が必ず得られるのである。勤労人民と独占資本の支配階級とのあいだの抗争の結果がどうなるかは、かかる見地からすれば、すでに決定されているといえるのである。生者必滅は生者がその使命をおえたときに必滅の理法として必然に作用する。そのときにはそれに代るべき新たな世代が生れ出ているのである。

「マルクス主義は、それが真理であるがゆえに不敗である。」といったレーニンの言語は決して単なる彼の狂信的自負ではないのであり、世界いたるところで歴史的專家がその客観性・科学性を実証している。その実証を認め得ないところにブルジョアジーの階級的弱さと悲劇的運命の予定があるのである。われわれは、新中国の社会体制の原則について無知であるがゆえに、その平和政策、貿易の発展性についても極めて懐疑的である一部権力階級の対外政策について危懼の念を抱かざるをえない。国策を誤らぬよう樹てうるものは、前へむいて歩くとのでざる指針をもつ人民のうちの新勢力だけである。旧きものの退位は、それが現実に積極性を失ったがために強要されるのである。

〔註〕

- 1 長谷部文雄訳「資本論」第一部・青木書店版 七九頁
- 2・3 郭沫若著・平野義太郎編訳「日本国民に訴える」 二四頁・四九頁
- 4 シュテルン著「スターリン哲学入門」青木文庫版 二三頁
- 5 スターリン著「大祖国戦争」 二二頁
- 6 岩波版「日本資本主義講座」第二卷 七〇―七二頁参照

7 毛沢東著「実践論」国民文庫版 三五頁

8 右 同 書 一〇—一一頁参照

二、ソ同盟における富農対策

——その合法則性——

国家権力がプロレタリアートによって掌握され、主たる搾取者たる資本家・地主が階級として消滅してしまつた国では、階級社会における根本的矛盾——生産の社会的性格と生産手段の私的所有との間の矛盾——もまた当然消滅する。この根本的矛盾の消滅の結果、科学もまた支配階級の私的利益に奉仕する隷従的關係から解放されて、人類の福祉をすすめる役割を完全にはたすことのできる自由を与えられる。ここでは、科学によって得られた認識は、実践によってその正しさを検証され、実践は正しさを検証された認識に従わされる。実践と認識とが内面的關係において統一されるから、科学のために絶えず前進の道が拓かれることになる。真理を真理として認め、それを実践に移すことが自由である場合にのみ学問の進歩、誤りなき政治、生産力の發展、人民生活の向上、総じて社会の進歩が期待される。人間による人間の搾取を支えていた諸条件の撤廃に成功したソヴェト体制のもとにおいて、はじめて眞実を恐れ、人民を欺ましなければならぬような社会的・政治的・諸条件もまた一掃されたのであり、この体制のもつ進歩的・強靱性の源泉は實にそこにあるのである。

事物の關係を正しく認識し、眞実を恐れず、眞実に従がう、そういう一種の合理主義がソヴェト体制のもとでは支配的である。いいかえると、外界——社会と自然——の運動を律する法則の客觀的存在を認めて、その法則に従つて行動するといった合理主義である。

社会と自然とを支配する運動法則は、人間がそれを認める、認めないに拘らず存在し、人間の意思や願望からは独立に作用する。それゆえ、人間は外界に働きかけ所期の目的を達しようとするならば、外界を支配する運動法則を認めそれに従わねばならない。もし、人がこの法則に従わずこれに逆らって行動するならば、その結果は必ず失敗に終るであろう。そういう意味で、唯物論者は人間の恣意を制し、人間の意思から独立した外界の存在とその本源的性質を認めるのである。

それで、この立場にたつものは、やって出来ることと出来ないことの判断を、人の恣意や欲心や願望にまかせてではなくて、客観的条件の精密な分析の結果によってする。この場合も人間の意思から独立に存在する物質的諸条件についての考慮が第一位を占める。物質的諸条件が具備するにいたれば、精神的諸条件もそれに照応して成熟する、そうなった場合に行動をおこすのである。

例えば社会革命については、社会の生産諸力と生産諸関係との間の矛盾の成熟程度の如何が、革命の成否を決定する基本的条件だと考えられる。「一つの社会構成は、すべての生産諸力にとって発展の余地がなくなるまではけっして没落するものではなく、またあたらしい、より高度の生産諸関係は、その物質的な実存諸条件が旧社会自体の胎内で孵化しおわるまでは、けっして従来のものにとってかわることはない」とマルクスは教えている。

社会革命は少数の権勢欲に餓えた野心家の謀略煽動によって起すことのできるものでもなく、他国へ押しつけ輸出のできるものでもない。当該社会の物質的生活を支える生産力が一定の発展段階に達し、それ以上の飛躍的發展のために、新しいより自由にして高度の生産関係を要求しはじめた時、生産力発展のための要求として生産諸関係の・社会の政治・法制的上部構造の変革——社会革命——が現実に必要な問題として且つ解決可能な問題とし

て提起されるのである。その時には現存の生産諸関係が、生産力の発展を促進する積極的機能を失って、反対にその発展を妨碍する桎梏に転化しているという事情が起っている。生動する生産力に立ちおくれ伸展性を失って化石化した生産関係は、すでに死滅を、新らたな生産関係による交代の必然を、示しているのである。生産力と生産関係の不適應かる起る矛盾は、直接的生産者―被搾階級の生活の耐えがたい窮乏、困難となって現れ、したがってこの階級の反抗が公然たる内乱・階級闘争となつて激発する。支配・搾取階級もまたこのような段階では、従来通り支配し生活することが不可能になる。例えば、植民地の帝国主義的支配は土著民族の極度の窮乏と民族解放運動の高揚のため、植民地領有者にとつても不可能となる。このとき社会革命が起るのだが、この革命は社会のすべての人々の日常的物質生活の再生産過程に生じた矛盾の要求する解決方法にはかならない。

社会革命は、いうまでもなく、社会のうちで自然発生的に成長した物質的諸条件や矛盾によつて、自然法則の結果のように必然に起るものではない。それは変革を要求し、変革を目的として行う人々の意識的闘争によつて遂げられる。しかしながら、変革にたいする人々のさまざまな意識は、意識それ自体独立に考察されるべきではなく、むしろ「物質的生活の諸矛盾から、社会的な生産諸力と生産諸関係とのあいだに現存する衝突から」説明されたければならない。そういう意味で、人の意識を決定するものはその人の社会的存在である。

一般的には社会の運動法則・史的唯物論の理論を導きの糸として、それにしたがつて行動するものの行動は、必然の結果を予想した意識的行動であるがゆえに、その目的をはたすのが当然であるといえるのである。このことを実証する一例として、マルクス・レーニン主義を政治の指導原理としてたつ国・ソ同盟の農業政策の一斑を次に示そう。

プロレタリアートが國家權力を握った場合、先ず地主階級についての政策はどうか。これについてはマルクス主義の古典が教えている。「大地主の場合だけは、事態はまったく單純である。……そこでは、どのようなためらいもいらぬ。……竟は大地主を工業資本家とおなじように單純に収奪しなければならぬ」と。ロシアでは十月革命の勝利と同時に、土地に関する布告が発せられ、土地私有を廢し地主の所有地は無償で國有に移された。これによって二万七千余人の大地主階級は、階級としての經濟的地盤を奪われ一掃され、農村社会主義化のための最も重要な礎石の一つがすえられた。

階級としての地主を比較的簡單にかたづけることができたのは、地主階級が農業生産にたいして殆んど積極的機能を失い、純粹の寄食階級として、自己を社会的に現實に無用化していたからである。もともと、地主の土地を農民へ、農民へのみ、のスターガンなしでは「貧農、半プロレタリアを味方にひきつけ、中農を中立化」して十月革命を成功させることができなかったのである。地主の土地を農民の熱望に應じて収奪すること、それが革命の要求の一つだったのだから、だからこそ人民の党は、この人民の要求にしたがってまず地主的土地所有の廢棄によって、ロシアの農民を封建的農奴制から完全に解放したのである。

これとおもむきを異にして、農村ブルジョアジー——富農を階級として絶滅するためには、十余年にわたる慎重にして忍耐強い階級闘争と社会主義社会建設の結果にまたねばならなかった。富農絶滅の目標は社会發展の法則によって予め確定されたものであり、この目標に到達するまでの過程における方法手段は、マルクス・レーニン主義の科学を政策実践のうえに応用した美事な一手本ともいべきものである。それは富農のよって立っている農業における資本主義的地盤を切り崩すと同時に、富農生産にとって代るべき社会主義的生産を築きあげてゆ

くという方法によって行われた。反動的・高利貸的・投機的・生産者としての富農のブルジョア的性格をレーニンは次のように描きだしている。

「富農は、もつとも残忍な、もつとも乱暴な、もつとも野蛮な搾取者で、他の国々の歴史で地主・皇帝・僧侶・資本家の権力をいちどならず復活させた。……この吸血動物は、戦時には人民の窮乏を利用して金をもうけ、穀物その他の農産物の価格をつりあげて、幾万、幾十万の金を蓄積した。このくもは、戦争のために零落した農民を犠牲にし、飢えた労働者を犠牲にしてこえふとった。このひるは、勤労者の血をすいとり、都市や工場で労働者が飢えれば飢えるほど、いっそう富んでいった。この吸血鬼は、地主の土地をその手中にかきあつめてきたし、いまもおかきあつめているし、また、たえず新しく貧農を借金奴隷化している。」（レーニン「労働者諸君、最後の決戦へすすめ！」）

このような資本主義的に生命力旺盛な富農が、すべてのブルジョアジーのうちで最多数千七百余万人——総人口の約一〇パーセント——を占めていたという事実だけを見ても富農を階級として絶滅するのは容易でなかったことが察しられる。富農はただその数が多かっただけではない、その経営の進歩していた点でも、その商品穀物の生産高の点でも、十月革命当時のロシア農業を代表して立つだけの実力をもっていたのである（後の表参照）。その大部分が非農民、都市労働者の食料となる商品穀物の五〇パーセント以上を生産していたところの富農を、どうして成立早々のソヴェト権力が一挙に絶滅することができたろう。富農をつぶすことは労働者、赤軍、一般市民の糧道を切断し、ソヴェト権力を亡ぼすことであつた。ソヴェトがそんなことをしなかつたのは当然である。ソヴェトは自己を弱体化し、自己を亡ぼすことではなく、社会主義を打ちたてることを、それを強化

し、共産主義の段階へまてたかめることを、最高の任務としている。

社会主義社会建設の任務を引き受けたプロレタリアートの党は、農村におけるブルジョア＝富農絶滅を党の使命としてどうしてもやり遂げねばならぬ責任を負っていた、そして、逆説のようだが、党はすべての階級の廢止——社会主義社会の実現——を確実に誤りなくやり遂げるために、一九二九年の春までも農富を階級として維持する政策をとった。党は富農を直ちに階級として絶滅するのではなく、それをしばらく維持するのが、社会主義の大業を完成するゆえんであることをはっきり見透せたのである。富農の即時絶滅をわめきたてた党内の左翼的偏向は抑止された。富農の暫時的存在を認めていた間の党の富農対策はどのようなものであったかというに、それは一九一九年三月ロシア共産党第八回大会において次のように決定された。

「富農、すなわち農村ブルジョアジーにたいするロシア共産党の政策は、彼らの搾取者的意図にたいして断固として闘争し、ソヴェト政策にたいする彼らの反抗を抑制するにある。」

ソヴェト政府はその時その時の諸条件に従って、また可能な場合には必要な諸条件を絶えずつくり出して、そのもとで可能なすべてのことをしてきた。すなわち、富農のソヴェト政権にたいする直接の反抗はもとより鎮圧されたが、彼らの穀物の売り惜み買い占め、及びその結果の穀価騰貴の抑制もまた適時行われた。一方、富農の資本主義的生産にとりかわるべき社会主義的生産の組織——集団農場——の育成を強力に進めつつあった。

「あらゆるものは変化し、あらゆるものには時と場所とがあり、したがって問題もまた具体的条件に応じて提起されなければならない。」これがマルクス主義の哲学である。俗言によれば無理を決してしないということにつきる。無理をすれば失敗する。それを避けるためには具体的諸条件をよく観察し分析し、一般法則を具体的諸

条件のもとで生かし——特殊法則として把握する——実践するに足るだけの科学的政治能力がなければならぬ。この能力をもちうるものは、ブルジョアの利害関係から自由な、科学・真理にたいして謙遜・従順な、人民の党のみである。

富農の存在を原則として認めず、富農との闘争を「一隣たりとも」やめないというのが党の一貫した政策であり、闘争の方法は勝つことを目的として、その時、その場所の具体的条件を考慮して決定されたのである。それで富農を残存させながら階級闘争において、絶えず彼らを抑制し駆逐して行く過程は、同時に富農を階級として絶滅することを可能ならしめる諸条件がつくり出される過程でもあった。富農を階級として絶滅するための直接の主要条件は何かというに、それは「富農の生産をコルホーズとソホーズの生産でおきかえる」ことができ、富農の生産がなくてもソヴェト社会は食料その他の農産物について不足することがなくなるといふことである。

この条件がとるための前提は、工業生産力が発展して農業のために大量のトラクター・コンバインその他の農具、肥料等を供給することが出来るといふことである。また、農業の側ではそれまでに経営の集団化が相当に進んでいて、機械の導入によって農業の本格的な社会主義的大規模生産が行われようとする条件が出来ていなければならぬ。社会主義農業の創造、発達によってロシアの個人的小農経営を揚棄し、ソヴェト社会の基礎を社会主義的農・工業に統一強化するという大業の線に沿うて、階級としての富農絶滅は行われるよりほかなく、また、かく行われたがゆえにこの闘争の結果として必勝が予定されたのである。富農絶滅の闘争は、同時にロシアにおけるおくれた小商品生産につながる個人的小農経営を揚棄して社会主義的大規模経営へ移行させるための闘争として行われた。富農が絶滅されたのちは、それに代るべき新しい生産様式をつくり出さねばならぬか

つたからである。レーニンはすでにソヴェトが政権を掌握した当初の時期、第一回全ロシア農民代表者大会において云っている。「大規模な模範農場における共同耕作へうつることが必要である。それなくしては、ロシアが

おちこんでいるこの崩壊から、このまったくの絶望状態から、ぬけだすことはできない」からである。

十月革命後十年、一九二七年一月第一五回党大会でもまた、富農の収奪を許すべきでないと言明せざるえなかった。その理由はやはり当時富農が占めていた穀物生産における役割が、集団化農場のそれに比較して相当大きかったという事実にある。

上の表でわかるように、富農の穀物生産高は戦前にくらべ一九二七年には三分の一以下に減少したが、なお商品穀物の二〇パーセントを供給していた。そして、これに代るべきコルホーズ、ソホーズの供給した商品穀物は富農のその三分の一にも足りなかった。このような状態のもとで富農にたいして決定的攻撃に出ることの出来なかつたのは明らかであり、もしそれを敢てすれば穀物は失われ富農は強化され覚は必ず敗北したであ

戦前	穀物生産高		商品穀物数 (農村外へ)		商品化率 %
	百万 ブード	%	百万 ブード	%	
地主	1,900	38	650.0	50	34
中・貧農	2,500	50	369.0	28.4	14.7
計	5,900	100	1,300.6	100	26
1926~1927年					
ソホーズと コルホーズ	80	1.7	37.8	6	47.2
富農	617	13.0	126.0	29	20.0
中・貧農	4,052	85.3	466.2	74	11.2
計	4,749	100	630.0	100	13.3

9)

らう。ごあるから富農の絶滅を目的とする攻撃はその必勝の可能性がつくりあげられるまで、当然控えられたのである。

ところが、それから二年後一九二九年には右の穀物生産における富農とコルホーズとの比重が変転してきた。それについてスターリンは「ソ同盟における農業政策の諸問題によせて」（一九二九年十二月）のうちでいっている。「今はわが国には富農に打撃をあたえ、彼らの反抗を撃破し、彼らを階級として絶滅し、彼らの生産をコルホーズとソホーズの生産でおきかえるための、十分な物質的基礎がある。」と。そして、その物質的基礎は次のようなコルホーズ、ソホーズの穀物生産の増大、富農のその減退であつた。

「一九二九年には、コルホーズとソホーズの穀物生産高は四億ブードをくだらなかつた、商品穀物を一億三千万ブード以上（一九二七年の富農のそれより多い量）提供した。

一九三〇年には、コルホーズとソホーズの穀物総生産高は九億ブード（一九二七年の富農のそれよりも多い量）をくだらず、商品穀物は四億ブードをくだらない量（一九二七年の富農のそれとはくらべものにならないほど多い量）を提供するであろう。¹⁰⁾」

この物質的基礎が出来あがつたうえで、一九二九年四月第十六回協議会において「階級としての富農」の絶滅を決定した。コルホーズ、ソホーズによって富農の生産がおきかえられたという事実の確認のうえで、はじめて全面的攻撃が開始されたのである。すなわち「富農を階級として駆逐するためには、公然たる戦いにおいて、この階級の反抗を撃破し、彼らから、その生存と発展との生産上の源泉（土地の自由利益権、生産用具、土地の賃貸借、労働雇用権、その他）をうばうことが必要である。」¹¹⁾というその闘争をはじめたのである。

一方においては、富農撃滅戦を展開するにあたって拠点となるコルホーズが全国的規模で建設されていた。集団的経営に結集されたコルホーズ農民の下からの直接の支持のもとに、国家権力の発意によって、上から行われ

たという点で特徴的なこの闘争は十月革命にひつてきする一大革命だといわれる。ロシアの農業が、不断に資本主義を生み出す小商品的個人経営から社会主義的集団経営へ決定的に転換されつつあったという事実は、富農の資本主義的経営が依つて立っていた経済的地盤の消滅を意味する。新たに生れて発展しつつある農業生産力は、それに適応した新しい生産関係を要求する。機械化された農業生産力にたいして集団的経営形態・社会主義的
生産関係が必然に照応しなければならぬ。この社会発展法則を正確に認識し、それに忠実に従つて行われたのがソ同盟における対富農戦である。この戦いはその戦略戦術のマルクス・レーニン主義による科学性のゆえに不敗が、必勝が、予想され、かつ予想通り実現したのである。

富農階級の絶滅戦の勝利的進行とともに、農村の社会主義への根本的な転換は、すべて保障されたとみなしてよい、のであり、ソ同盟の社会の物質的土台は、この時期の後は、社会主義的工業と相並んだ社会主義的農業の一枚岩として統一強化されることになったのである。

その後一九三〇年初には、ロシアにおける農業経営の五〇パーセントが集団化され、個人的小農経営はソ同盟の食糧生産のうへでは二次的、補足的役割を担当するにすぎない存在になった。世界で最もおくれた農業国が十数年のうちに、最も進んだ機械による工業的農業国に生れかわつたのである。一九三二年の第十七回ロシア共産党大会において、スターリンはこの事実を目前に示しながら次のような報告をおこなった。「勤労農民、わがソヴェト農民が、決定的に、かつ最後のに社会主義の赤旗のもとに立つにいたつたということを見とめなければならぬ。」

社会主義は幾千万の農村における小商品的個人経営を短年月のうちに、集団的大規模経営につくり変え、それ

によつて農民にたいして、乏しい生産⇨貧しい生活を豊富な生産⇨裕かな生活へ向上転化しうる確実な物質的條件を与えた。それだけでも社会主義は、人生的福祉にたいする歴史はじまって以来最大の寄与をしたものであると誇ることができる。しかしながら、社会主義の偉大さは人間福祉の物質的條件をつくりだす方法によつて、人間そのものを新らたにつくり変えることを企図し、実行し、それに成功しつつある点においてさらに高く評価されるべきだと思ふ。

レーニンは「農民は最後の資本主義的階級である」といったが、コルホーズはこの小所有者としての小農民を社会主義的コルホーズ農民に改造するための最有力なてことして作用する。極端な表現だが、社会主義はトラクター、コンバインを使つて農民の精神のうちに残っている資本主義的な一切の残滓をたたき出して、新しい社会主義的精神をもつた何億という人間を創造しつつあるのである。物質的生活條件が人間をつくり変え、つくり変えられた新しい人間がさらに物質的條件を変えていよいよ向上して行く、この弁証法の忠実な使徒として働く人民の党は他に比類なき偉大さをもっているのである。¹²⁾

——一九五四・一・一〇・稿——

- 1・2 マルクス著「経済学批判」マルクス・エンゲルス選集補巻3 四頁
- 3 エンゲルス「フランスとドイツの農民問題」マルクス・エンゲルス選集第十七巻 四五三頁
- 4 「十月革命は、何よりもまず、言葉から実行にうつつた。これがもつとも肝心なことである。地主からの組織的な土地取上げと勤労農民の手への譲渡がはじまつた。農民は安堵した。」コンスタンチノフ編集・堀江邑一訳「ソヴェト社会の解明」六七頁
- 5 スターリン「レーニン主義の諸問題」六月書店一九五二年版 四八〇頁
- 6 右 同 書 二八三頁

7 「スターリン全集」第一卷・大月書店版 二六一頁

8 スターリン「レーニン主義の諸問題」 二七一頁

9・10 右 同 書 四四二―四四三頁

11 右 同 書 四四九頁

「富農にたいする攻撃とは―富農を撃破し、これを階級として絶滅することを意味する。……富農にたいする攻撃とは、實際行動を準備し、富農に打撃を加えるということ、しかも彼らがおもはや立ちあがることができなほどの打撃を加えるということを意味する。」 同四四二頁

12 レーニンが次のように言ったの正しかった。「小農業経営者を再編成し、彼らのいっさいの心理と慣習を改造するという事業は、数世代を要する事業である。小農業経営者にかんずるこの問題を解決し、いわば彼らのいっさいの心理を健全にすることが出来るものは、物質的基礎だけである。すなわち、技術、農業におけるトラクターと機械の大規模な適用、大規模な電化である。」（前出「レーニン主義の諸問題」四四〇頁）